

# テーブルトーク

「不便益のススメ」を出版した工学者

ひろし  
川上 浩司さん(54)



不便だからこそ、良いことがある。そんな「不便益」を提唱し、この2月には若い人たちに向けて「不便益のススメ」(岩波ジュニア新書)を出した。「不便で手間がかかれば、工夫や発見ができ、多様な発想も生まれます」

専門はシステム工学。京都大学情報学研究科特定教授として、不便益を、物事の仕組みやモノづくりに生かそうと研究してきた。道を覚えられるように、通った道がかすれて消えてゆくカーナビを開発したり、わざわざ足

を運ばないと味わえない京都の老舗の魅力を紹介した「ほんものの京みやげ」(朝日新聞出版)の編集に協力したり。大学では、一風変わった個性的な研究者らを紹介する公開講座の講師に名を連ね、今月出版された「京大変人講座」(三笠書房)の著者の一人でもある。

スマホも携帯電話もカメラも持たない。「目的地に行くにも、街をうろろろすれば思わぬ発見や出会いがあり、風景も記憶に残る。予定調和はつまらない」(池田洋一郎)

は、当時のローマ政府が復興委員会のトップに、執政官経験者、今で言えば元首相を任命しました。火山の噴出物が5メートル以上積もるのを見て放棄を決め、今のナポリに新たな街をつくり、人々を救いました。一方、江戸時代の浅間山(群馬、長野の両県境)の噴火では、幕府の復興担当は勘定吟味役でした。今の財務省の課長クラスですね。復興費用も熊本藩に押しつけました。歴史的なデータを集めると、地域の災害の特質だけでなく、救済や復興の対処法の問題点もわかる。これは、次に起きる災害でも役に立つと思います。——地域文化など文化面の復興についてはいかがでしょうか。

地域文化は自然環境に適応しながら時間をかけてつくり上げられたものです。どう復興したいのか、という住民のイメージづくりが大切です。遺跡の調査研究を通じて、地域が歴史的にどんな文化要素を持ち、どう自然と調和していたかが見えることがあります。それをいくつも集め、地域の特殊性、共通性を認識しておけば、どんな災害にも適応することができます。

日本は災害大国です。いつ、どこで噴火や地震などの災害が起きても不思議ではありません。それを常に忘れず、事前に準備しておくことが必要です。——

◆「災害考古学」第4部は今回で終わります。第5部は豪雨災害について、7月ごろに掲載する予定です。

◇連載「災害考古学」は、朝日新聞デジタルの特集ページ(<http://t.asahi.com/urch>)でも読むことができます。